

## 目次:

近藤大博教授のご退官に寄せて	2
近藤大博先生のご退職に寄せて	3
近藤教授のご退職に思う	4
ご縁に感謝!	5
近藤先生と修論の思い出～	6
人生の羅針盤のような存在	7



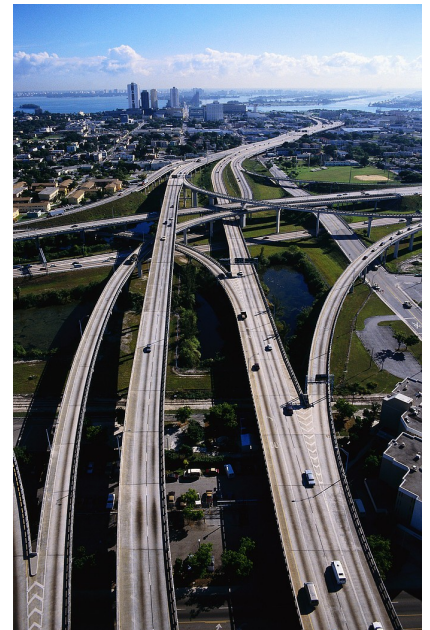
## 特集 -近藤会長 退職記念号-

今号の「ニュースレター」の企画を増子保志事務局長から聞いたのは、発行直前でした。サプライズでした。まさしく誕生日プレゼントのさいと同様です。

現在、どのようなおりでも、紹介されるさいの肩書きは、「日本国際情報学会会長」です。

つまりは、3月末までの日本大学大学院教授が、生まれ変わったのです。新たな人格が、誕生したのです。そう本人も自覚しています。

皆さんからのサプライズを有難く頂戴することにします。



日本国際情報学会 会長 近藤大博

## 事務局からお知らせ

平成23年11月26日(土)静岡市駿河区にて総会/大会を開催いたします。

学会員の皆様は、是非ご参加ください。

上記、詳細は10月10日にホームページに掲載いたします。

日本国際情報学会事務局

日本国際情報学会 ホームページ

<http://gssc.jp/siss/>

## 近藤大博教授のご退官に寄せて

日本大学大学院総合社会情報研究科  
国際情報専攻三期生 近藤ゼミ  
内山 幹子

今年3月に日本大学大学院を退官されました、近藤先生、今まで、本当にありがとうございました。

私は2001年4月に日本大学大学院に入学し、(いろいろな意味で、できの悪い私を)近藤先生のゼミ生として認めていただきました。ゼミは、ほとんど毎月開催されていたと思いますが、自分の論文作成が進まないのは苦痛ではありましたが、ゼミには毎回楽しく参加させていただきました。

ゼミ終了後には、毎回、夕食会を兼ねた会合があり、その席には、ゼミ生以外のいろいろな方々が、近藤先生を慕って参加されていました。近藤先生の幅広い知識・人脈により、いろいろな方にお会いすることができ、勉強以外の面でも多くのことを学ぶことができました。

小学校6年間、中学校・高校各3年間、大学4年間(私の場合は実は5年間)に比べると大学院での2年間は、時間としては最も短い期間でしたが、私にとっては、最も充実し、多くのことを学ぶことができました。これも一重に近藤先生の指導力とお人柄によるものと、感謝しております。

今後も、引き続き、ご活躍されます近藤先生の、ご健康をお祈りしております。

また、日本国際情報学会の会合の席でお会いできますことを楽しみにしております。



## 近藤大博先生のご退職に寄せて

理事・神戸芸術工科大学デザイン教育研究センター准教授  
岡村 光浩

私が近藤先生のご指導を仰ぐようになったのは、2003年に日本大学大学院総合社会情報研究科博士後期課程が開設され、その1期生として日大職員から大学に戻って以来のことである。学位請求論文を執筆する前に正規教員としての就職先が決まってしまうという、変則的かつある意味贅沢なキャリアパスで現職に就くことになったため、先生のご在職中に学位を取得することができなかつたことが心残りではあるが、同時に先生と出会えたことで今の自分があると申し上げることができるのは、私にとって名誉なことである。

実は近藤先生は、私の在学当時はゼミ生達に「私を『先生』と呼ぶな」とおっしゃっていた（もっとも最近では門下生が増え、皆が「先生」と呼ぶこともあり、あきらめられたようにも見える）。それは、ご自身の編集者・ジャーナリストとしての経験と矜持にかけて、「あくまでも編集者として」「修士論文は教員との共同作業だった」と、院生諸兄姉に評価されるよう、努めたい（以上Webサイトより）との先生の一貫した指導姿勢のひとつの現れとも言えよう。もともと社会人大学院であり、多彩な人材が集う研究科ではあるのだが、近藤ゼミに集まる院生の多彩さは学内でも突出していた（Webサイトの「ゼミ生の研究テーマ」をご参照いただきたいが、掲載されているのは実態のごく一部である）。

研究発表の場での議論だけでなく終了後の懇親会での雑談に至るまで、すべてが院生達には大いに刺激となって、それぞれの研究に、あるいは本務での工夫に反映されていく、社会人大学院の醍醐味がそこにある。「名編集者」たる近藤先生のご指導あってこそそのネットワークの成長であり、日本国際情報学会もその延長線上にある。近藤先生と門下生たちの研究／活動領域は、いち大学の研究発表会として収まるには広すぎた。故に本学会が他大学出身者や研究者を加えて独立し、日本学術会議協力学術研究団体となったのも、ある意味当然のことであろう。学会に入会するなり直ちに理事を仰せつかり、第1回研究大会の実行委員として会長たる近藤先生のお役に立てたのも、初回にいきなり「（日大経済学部）大講堂」で開催することになり、準備にたっぷりと冷や汗をかいた記憶と共に、懐かしい思い出である。

現在私は神戸芸術工科大学でいわゆる一般教養の英語と大学院の論文作法を指導している。授業の一部に折々の新聞記事等採り入れながら学生達と一緒に考える「東日本大震災に直面して、アート&デザインに何ができるか」というテーマは、本務校においても目下最大の課題であるが、「アート&デザイン」がおのおのの仕事や専門に変わるだけで、それはすべての仕事や研究領域において同様であろう。

この大命題に立ち向かうには、それぞれの領域の専門的なテクニックだけでなく、社会全体を「様々な切り口から」そして「複数の視点から」見る目とバランス感覚が欠かせない。それはすなわち、近藤先生のライフワークである「総合雑誌拾い読み」的な視点であり（授業中にもときどき自分のやっていることに近藤先生のスタンスと似たものを感じて思い出し笑いをしてしまう）、近藤先生が立ち上げ育てた日本国際情報学会の取り組みとも重なるものであると信ずる。

この文章はご退職のお祝いとしてはやや趣旨がズレているかもしれない。だが時代はますます、これまでも増して近藤先生と日本国際情報学会を必要とすると確信する私としては、先生のご退職にHappy Retirementのお祝いを申し上げつつも、今後ともますますお元気で私たちを叱咤激励していただきたいと願わずにはられないのである。

## 近藤教授のご退職に思う

鈴木 満由美

近藤教授とはじめてお会いしたのは、大学院の面接試験の日でした。事前に何のお伺いもせず大変失礼なことでした。「どうして私なのですか」という先生の開口のお言葉にもかかわらず、ゼミ生にしていただきました。2007年（9期生）のことです。国際情報専攻の2年間と研究生1年間、お世話になり、日本国際情報学会の会員にさせていただき今日に至っております。

入学して驚いたのはサイバーゼミでした。教授の講義をきいて学ぶのではなく、参加しているゼミ生が自分たちで発表者、司会者をつとめ質疑応答し、最後に一言、先生の的確なアドバイスをいただくというスタイルでした。自分の研究内容とは大きく違う人も、自分の意見を述べたり質問をしたりしているのです。ゼミ生の皆さんの博識というか教養の広さにただ感心してしまい、何も言えない自分の無力さを感じるのです。何とポーとした人だろうと思われていたのではないかと思います。

刺激的だったのは、入学してすぐの塩原で行なった合宿ゼミ（2007.5.26）でした。論文をまとめるため、在籍しているゼミ生が参加していると思っていました。しかし、修了生の方が多かったような気がします。当時のまとめ役の8期生の蒲生恵美さんのお力でしょう。書物をよんでいるだけではなかなか自分のものになりません。修了生の諸先輩方を知ることができたこと、そのうえ発表やまとめ方に触れさせていただいたのは、私にとってとてもプラスになる学習法でした。通信制なのに、まったく意外でした。

講義をするとき、自分の知識の範囲で自分のやり方でするのが楽です。学生の理解度をみてどの程度まで教授するのが効果的かと考え指導します。最近、「誉めて伸ばす子ども」という指導法が叫ばれています。子どもは誉めれば、どんどん伸びていきます。不思議に今まで出来なかったこともできるようになっていきます。私はとてもものんびりしているので気付かなかっただけかもしれませんが、近藤先生にとくに否定されたことはありません。メールで「〇〇してみたいのですが、どうでしょうか」「△△してよいでしょうか」と、相談をよくしました。ほとんど、肯定してくださいました。修士論文のまとめの章で困っていたときも、何枚かのコピーされたプリントを送ってくださいました。私は研究生で残り、パソコンも上手くなく操作もままならなかったにもかかわらず、修了生のまとめ役をさせていただきました。そのため、学習環境を整えられ、この学会と、紀要11月号と2月号に書くことができました。通信制だからかもしれませんが、学生の理解度をみて、支援にまわる教授法で導いてくださった近藤教授のおかげだと思っています。

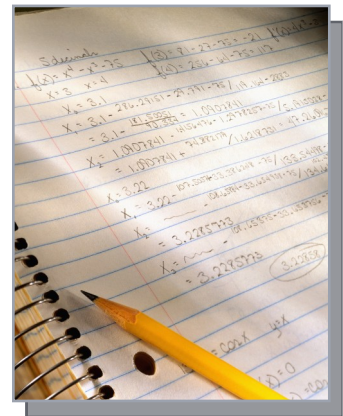
近藤教授に「専門は何ですか」と尋ねられたことがあります。「広い視野と新鮮な国際感覚を持った国際経済人の育成」をめざす学舎だったにもかかわらず、それに即した回答はできませんでした。研究とは逆の広く浅く知識を必要とする義務教育の教諭を長くしすぎたせいかもしれません。スクーリングの際、竹野一雄教授に私の研究内容は僕の専門範囲みたい、また、学会論文をみてくださった佐々木健教授にこの内容は文化情報だといわれるくらい、専門性に欠けていました。きっと指導しにくい学生だったと思います。今後は「文化政策です」といえるように努めます。

2008年度以降は、ご退職の準備をなさっていたのでしょう。ご体調不良のせいも手伝ってか、集合ゼミも合宿ゼミも参加者が減り、この学会に軸足が動いていきました。私は体が小さく体力がなく飲酒できないので、学会員の皆さまとペースがずれるかもしれませんが、今後もワンポイントアドバイスをよろしく願いいたします。

ご縁に感謝

戸村知子

好奇心旺盛で時折みせる少年の目。  
大学院教授を退官されて、ますます輝いておられるのではないのでしょうか。  
本学会の育ての親、近藤先生。  
名調子の講演をまた拝聴できることを楽しみにしております。



## 近藤先生と修論の思い出～

長井 壽満

2002年に日本大学大学院総合社会情報研究科に入学、近藤ゼミに所属しました。大学では理系の勉強をしていました。文系大学教育を飛び越して文系大学院に入学。どんな勉強の仕方をすれば良いか当初は戸惑っていました。近藤先生とは懇親会、夏スク時に会う機会はありましたが、なんせ短い時間、なかなか親近感が湧く程までのお付き合いにはなりません。最初の一年は仕事+レポート+サイバーゼミで大忙し。近藤先生が身近に感じられたのは修論に入ってからでした。日本大学塩原研修所ゼミ合宿で先生から直接修論原稿にコメント頂いた時をはっきり覚えています。

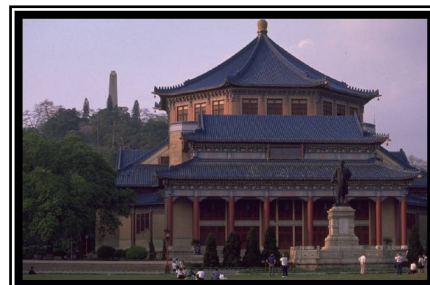
日本大学塩原研修所のロビーで先生に呼びとめられ、修論について最初のコメントでした。先生のコメントは「読み手に判るように書く」、「主語、動詞、助詞、目的語、述語、補語などを正確に記す」との内容でした。私はバイリンガルの環境で育ったため、無意識的に日本語の「てにおは」と主語・動詞・目的語の使い方が「あやふや」です。長文を書いた経験がありません。その後、レポート作成、その他文章を書く時には「読み手に判るように書く」を座右の銘としています。近藤先生は私に文章を書くときは「独り言でなく」、「伝わる文章」を書かなければならない事を教えてくれた師匠です。

近藤ゼミのメンバーはユニークな方が多く日本大学塩原研修所での合宿ゼミでの懇親会も懐かしい思い出です。もう卒業して8年過ぎましたが、今でも当時の学友との付き合いが続いています。近藤先生にはご迷惑かもしれませんが、仲間と飲む際に先生に声をかけると気楽に参加して頂いております。こんな長いお付き合いができる近藤先生、人柄でしょうか。近藤先生、なかなかご自分の事は話しません。それでも、酒の席で先生との雑学談義の際、言葉の端々から教養がチラチラ見えてきます。そのうちじっくりと先生の雑談を味わわせて頂きたいと期待しています。そろそろ時効で話せる頃ではないかと期待しております。

頭髪の多寡が気になる年になりました。通信の仲間もおじさんの年頃になっています。昔程飲めません。それでも、時折飲み会の際には是非先生にも来て頂ければと常に思っています。酒量は減りましたが、本学会員や日大大学院の仲間との飲み会はこれからも続きそうです。

地震があろうと、原発事故があろうと、本学会員や日大の仲間とは近藤先生を含めて長い付き合いになりそうです。

以上



## 人生の羅針盤のような存在

国際情報学会 監事  
日本大学大学院総合社会情報研究科  
近藤ゼミ6期修了生 西尾 安正

このたびの近藤先生の日本大学退職にあたり、不肖の弟子ではあるが少々思い出を述べさせていただきたい。

近藤先生に初めてお目にかかったのは、たしか大学院の入学試験の面接時だったと思う。生まれて初めて書いた拙い研究計画書に鋭い指摘を加える先生に、つい熱くなって反論をしてしまったのだが、後に懇親会の席でその話をしたときに、先生は「キミはあの面接が良かったから」と言ってくださった。それが大学院生活のスタートに際しての大きな自信になった。

ゼミでの研究活動についても先生から学んだことは多かった。先生は、決して院生にご自分の考えを押し付けず、自分のやりたいように研究をさせてくださった。中央公論社という一流の出版社で編集長まで務められ、第一線の研究者とも交流のあった先生にとって、駆け出しの大学院生の遅々として進まない研究に苛立ちを覚えることも多々あったかと思うのだが、「教員がアドバイスをしてしまうとキミたち院生はその時点で思考停止に陥ってしまうから」と、院生が自力で研究を進展させるのを我慢強く見守っておられた。私は近藤ゼミでの二年間の研究活動を通じて、研究の本質というものを学ぶことができたと思っている。

また先生が院生の自主性を重んじたのは、研究以前に、院生をまずひとりの社会人として、対等な関係として捉えていたからだと思う。根っからの学者ではなく、出版社の編集者として人生の大部分を生きてきたからこそ、上から目線を廃し、社会人院生と同じ目線に立っておられたのだと思う。

通信制大学院ということもあって、普段、パソコンのカメラを通してしかお会いできない先生に実際にお会いすると、いつもダンディないでちをされていて少なからず驚かされたが、社会人として内面はいうに及ばず外見も重要であるということも教えられた。

このように、研究者としてだけでなく、ひとりの社会人の大先輩として、羅針盤のような存在であった先生のこのたびの退職を、不肖の弟子としてはひそかに寂しく思っている。だがそれ自体、先生の教えに反することであろう。いつまでも先生に寄りかかることなく、真の意味での自立を果たすとともに、国際情報学会の発展に少しでも尽力できるよう精進していきたいと、決意を新たにしている。



- ・平成23年10月29日(木)  
総合情報部会・情報活用研究部会共同主催  
「情報交流会」三島市（三島市民文化会館）
- ・平成23年11月26日(土)  
「総会・研究発表大会」静岡市駿河区(静岡グランシップ)
- ・平成23年度 会費未納の方は納入をお願いします。
- ・学会員の方にはメールで行事通知をしております。  
メールアドレスに変更があった場合は事務局へ  
連絡ください。



[上記についての詳細は、当学会HP参照ください]

ホームページをご覧ください  
<http://gssc.jp/siss/>

## 編集後記

今号は、3月に日本大学大学院をご退職されました近藤会長の退職記念号とさせていただきます。会員の多くの方が近藤会長から薫陶を受け、現在に至っております。近藤会長への感謝の気持ちと益々の会へのご尽力を賜る意味を込めまして本号を発行させていただきます。執筆者の皆様にはお忙しい中、ご協力ありがとうございました。また、本特集をご快諾いただき巻頭のお言葉を頂戴いたしました近藤会長にも深謝致します。

編集担当

増子 保志



〒422-8526 静岡県静岡市駿河区谷田52-1  
静岡県立大学国際関係学部 諏訪一幸研究室  
日本国際情報学会